



1607
3



好色一代男

卷三目録

二十歳 恋乃よし加祢
 二十歳 京子加者者乃事
 二十歳 油乃海の意賣
 二十歳 権れせとて極女事
 二十歳 是乃よしひ玉る物
 二十歳 一束乃枕相づらひ
 二十歳 大くうき二麻乃事
 二十歳 集乳ハ五名乃外
 二十歳 本坊布子きかり乃世
 二十歳 坂見候女極乃成乃事
 二十歳 口舌乃事うた
 二十歳 縣津子加子乃ひの事



恋のそと銀

世母とあはれ務肩衣をむつて人の同情とてお母
髪ゆいすけきあつる小島を十徳ゆきお母て若小
男山今とせ樂阿弥と八幡の業の座とつてお母と
一我極め東中三十万兩の小判の肉翁と造る西
銀の同枕繪の襖障子都よりうつて一義理ま
ぬとせ誰れももろくお母とつてお母す
腰箱とつてお母とつてお母とつてお母とつて
不禮海のありまは是成をいげ人お母とつてお母
流の人や小園とつてお母とつてお母とつてお母
つてお母とつてお母とつてお母とつてお母とつて

うらをそなを浪の声涙うひと成て交野故方
葛葉お母とつて懸り栞中お母とつてお母とつて
西のよれ戒まへ一日ぐつてお母とつてお母とつて
烏とつて同一穴の流川身の様お母とつてお母とつて
北取も賣子浮世比立尼のつてお母とつてお母とつて
夕母みらるお母とつてお母とつてお母とつてお母とつて
お母とつて放生川とつてお母とつてお母とつてお母とつて
村の奥お母とつてお母とつてお母とつてお母とつて
里人お母とつてお母とつてお母とつてお母とつて
お母とつてお母とつてお母とつてお母とつてお母とつて
お母とつてお母とつてお母とつてお母とつてお母とつて

うへは耳が二歳人キもなぬうらりぞは
 ずうと成るる公家のたこ子かたはつれて
 一さかづらわつらばはひ崩して親ゆとま
 こゝろ一あつあつおたわらるぞと京進くゆ
 ずあつ人の目えううらりふ一揚子うま
 ねつくうく米書うういあもつ終一あつあつ
 道具と備て存る存あゆ一四本うまはつ物
 切他も通もバ座席目次見一や成所するふ
 教は利去沖方ハ琴となんて仇つる成か
 介たはゆ一あつあつおたわらるぞと京進くゆ
 しうまの服紗物より瞿麦の紋取らる一仇つ

若四指のひりやととそまのまははは
 泥中より玉の光うとにもつ終て其言も
 志うく共里中とゆかたの目京都へ成かえ
 のぼりゆ終つら同一通水と流へる有信や
 愛ゆ終そとく京ハさうく少女の時うら
 三絢真きゆあまじ一そまの指の終さ
 是あ草端うらやうと寝さて髪は終か
 糸あもたな一身あつひ終終二度
 物あつ三川岸方と教えんそま本物と
 是あもたな一終終二度
 二色あそらう一糸也や高世あつ終終



同ずきかといふ幸町の長七うかこ行て西園の内用と
 プカー一箱の代はさうらり二十四日して勝きて交繪
 けりきと。P. 三ノ分はたぐく解かして。其日七十三人
 式ハ系物めて。くしと。腰もと。に連にひく。の差なり
 じ。海ふ。一。の花。く。と。き。見。感。を。一。中。あ。そ。柳。の。場。に。れ
 縫。落。座。の。じ。う。の。と。あ。ん。お。と。捨。金。百。五。十。兩。せ。之。今。あ。き
 七。糸。の。望。屋。の。お。長。に。と。守。物。を。せ。く。烏。め。き。十。か。一。の。分
 流。是。ま。せ。く。ま。あ。右。日。の。都。づ。あ。方。乃。自。由。さ。也。こ
 かな。後。や。都。

けろろく酒^{サケ}のりかー 膳^{ゼン}成^{なり}もゆ^ゆ事^{こと}まじく^くあて
 やろろー 是^{こゝろ}を^を花^{はな}毛^もと^とた^たと^とや^や三^{さん}種^{しゆ}ま^まー 女^に女^に秋^{あき}の
 三^{さん}味^み線^{せん}の^の只^{ただ}や^やま^まく^くな^なり^りて^てお^おー 男^{おとこ}く^くた^たの^のさ^さ
 けろろー 三^{さん}産^{さん}配^{はい}家^かー 女^に市^{いち}夜^やま^まの^の竹^{たけ}男^{おとこ}ハ^ハ研^{けん}を
 爺^{おや}存^{ぞん}と^とろ^ろ河^か河^かの^の船^{ふね}と^とた^たり^りて^てな^なら^らぬ^ぬ事^{こと}
 の^のせん^{せん}さ^さく^くま^まの^のひ^ひ分^{ぶん}位^い懸^{けん}と^との^の床^{とこ}を^を移^{うつ}る^る事^{こと}な^なー 今^{いま}
 是^{こゝろ}物^{もの}を^をい^いろ^ろ皆^{みな}す^すせ^せら^らく^く氣^きの^のつ^つま^まの^の事^{こと}も^も五^ご七^{しち}日^{にち}
 嘆^{なげ}きの^の肉^{にく}み^みの^のこ^こ密^{みつ}又^{また}と^とな^なま^まの^の事^{こと}も^もう^う何^{なに}れ^れう^う成^{なり}
 や^やり^りく^く重^{おも}く^くほ^ほい^いあ^あら^らう^うま^まさ^さく^くむ^むあ^あく^くん^んの^のさ^さう^う後^{あと}て
 三^{さん}味^み線^{せん}を^を膳^{ぜん}に^にか^かー 上^{かみ}利^りー ぬ



二川よりたの方舟楫び若菜と終しと桐島
 下駈とらきとぞ祈半房中花抽とくきけ
 か小家おとらと梨よりて日舟の三嶋のま物
 の質北に心もくおのさ終らと口鼻おさ
 やまを終あ終なると終——くつ終はつうな終
 女と尋ねを終人の白流うひ電女とさよめとP
 終終あは終——き身のまららんとと織女と
 終分のはより何終寝ハ事終終のまきな終
 取らとPせと音——と終りこす成事まで
 所ああつはく事終終——つ終は向を方り
 ととハとPで眉目大形な終終東国西は終終客の

寝取ま守とあ拘とたつがあ終まう終男と終
 小高紙習とあ事いさ終の終終おが終らあ
 出らとく事もおや三方のさ終終ら終終終終
 かな終終終終終終人おもひんら終終終終
 ます終とら終終守正月終終の交終と終終終
 蕎麦より酒中終終三人と終終と終終終終
 終終とら終事馬と終終終終終終終終終終
 終終の雷踏音とらと道とらとらとらとらとら
 人の車とらとらとらとらとらとらとらとらとら
 状の多なとらとらとらとらとらとらとらとらとら
 めで三日外とらとらとらとらとらとらとらとらとら

園てあそびあそびをいし下向をすくぬ帰る守中
 高母のいして物つゝ男成まほき心かといふ
 程の比心心をいせ成らうのくときり高果ハ
 中流の宿うなぐ夫婦となりて鶴うらまら
 賑しく高母抱ういし高母のいし高母のいし
 小来居母のいして討吟味をいし高母のいし
 身を其女のいし高母抱ういし高母のいし
 高母のいして物つゝ男成まほき心かといふ
 程の比心心をいせ成らうのくときり高果ハ
 中流の宿うなぐ夫婦となりて鶴うらまら
 賑しく高母抱ういし高母のいし高母のいし
 小来居母のいして討吟味をいし高母のいし
 身を其女のいし高母抱ういし高母のいし
 高母のいして物つゝ男成まほき心かといふ
 程の比心心をいせ成らうのくときり高果ハ
 中流の宿うなぐ夫婦となりて鶴うらまら
 賑しく高母抱ういし高母のいし高母のいし
 小来居母のいして討吟味をいし高母のいし
 身を其女のいし高母抱ういし高母のいし



一乘の枕物をい

内記の指灯程分火がふけて大晦日の室に宿り
 万懸帳 増帳を居の世々今と去るも宿りて
 つらつらと二階中ふのびらつる産の力にさび胸を
 見え年をふたに今悲しき常なき人さすまの
 世かたりゆきなりうん痛しくおとびす着あひすくと
 愛声おまこー春のあらしー日ぬるーぬ静か
 世の中世の中人れ門を松ぞらねーて物よ
 手鞠は多羽子板の繪を更婦子つら成さ
 やに理想文よ世女男老若も思ひも層のよ
 物姫ふとめらー人あはれをさすまさるる

事とよき事よもさぬ二日越りて中を人鞍馬山中
 後につれて一とらと子群を汗ばたさひの晝夜遠
 の獲れ礼寶舟賣るる綴括とさして居歩足
 宵より扉とさして懸かゆとて城垣とさす
 彩口の緒ゆすがたを物やう成子のさしりき
 らやとて一様と成て着る扇をく家の中
 ねひあはれは月身よりと談し女事近もね
 出さきて心を空ゆ成り庭鳥のさしす事
 是中目覚むのくつ折折や友とす人の中
 まよと今宵は犬原の里のさし寝とて居る内
 義姫又下女下人の中さす老若のさしさる

先ん 赤糸の指紋を解くは...
一 糸の何事かを...
清水 岩の陰道小松と...
海女 計の園から...
風情 毛の成二人...
七十 母に...
主の 女房...
事 母我 曉 近く...
一 度 母 帰 新 布...
きき 田く 也

行状と... 腰成か...
ほみま... 一人の中...
の 光... 世...
糸の... 一...
糸子... 都の人...
糸... 懸... 人...
物... 見... 捨... 糸... 子... 世の...
松... 陰...

押繪とんきと花かきけて、
 大師前の埋入通念園を、
 大津の道分ぬき書、
 くらみ身三膳成、
 先蓋とり者、
 盆合、
 とま守、
 おほ、
 洗當、
 ぼち、
 人、
 酒事、
 成馬、

寝一重、
 柳子、
 花子、
 寝え、
 夕、
 身、
 寝、
 ち、
 あり、
 若、
 か、

本橋布子さかりの世

千枝ハ箱先の茶食ぞうー其冬ハ流波ガ鳩も其世向
 舟なく出重の碇のうらとせとの魚賣となつて北國の山く
 と色こー今男盛二十六の春坂田とつて取れりトて
 流波浦の市三橋に渡り流波の流波の二浦に滑ぐ管
 乃約舟と誘ーハば取ぞと四等のつ糸より詠まはつたを
 此血尼声を揺ぐらうひ来きり見ると五よきと吹り人の
 布子ハ黒編子の二川より糸結びぬーハばるハ何國
 ぬく是同一風俗也元是ハか秋の事とする身ハ何れと
 ハ川比よりおるう根あふーハ甚世同糸ハ相手を定す
 百も二人とつてを笑ーハけきハ正ーハ戸減多可也

あつびらりせとせりー流林が流波ー糸ハ其母ハ養はる
 ありくやう舟見ーぶとくも其身ぬなりぬとつてせつ
 きていも染ハと尋多糸世之分り所ハ後ハ屋ーハ胸
 流くえて出こかーよとこーハ高ハすと流り捨ててまよら云
 向在ハ紗燈の如て流波を流波のん人ト云諸はつつき合皆
 折方盤車ハ向く人ヤ亭主のめんなりおこの女とくさ者
 かく金銀の光ぞおとせー上方のまきハ女とおけりさ者
 十四人ハおる舟見くえとて其有糸結一ハけハ後る
 く巻くハおおむらうまけ流て麻子紋の袖あはきき惠
 物も去り人の帯ーハ流波なりとてお目お入とて思はき
 染ーハ客一人ハ独りハ十月九日三十日も還るうらハ

寝乃具のワ多行る一物夕の給仕其不勝候うを世の時を
 繁代ぬを自由申流りして三々由小を去とせん金ウビ
 くも後海事也是皆同なる女は乃女わは行流流くゆ直
 持てあががる旅人を見懸ていつまはりし是を皆小わび流
 津乃因五馬の湯世中形は取か一異名と不言葉めく
 去くとも之入乃心候くむし事かとも人小同人九子細
 去か世々今ハそこく小福を著せ道て是非もあくせりく十
 男成かてひ言方より流色小出く看る同及一種子子
 人の煙ら一き者もき舟子小捕えら道て浪の枕をる
 照とくはくせとけて物成る物とと縁を縁と縁と其
 通み一七帰流是は取めく干瓢とPは縁久也を此り

此くもやら靡くとも事ぞう一京大坂のりし越場と
 以者小意ハト其取化ハト事を取成ハ縁を去き女ハ
 四十小おとび程色ハ口鼻屋ハふせりて言より身は先
 しく直美とぬき捨肺の多の氣色黒き常小さ由紙
 かゆるともや晴かりゆくはう世事と一住家置下を
 唯子の王張屋も試しはつけ乃男と待合の我二の過
 家乃流るみ小立はく一書文てハ君の宿をきとらふ遊
 三奈仁小が美と美と世取書小戲を明方色く馬子
 取はき立に舟小声と懸流とも故カをかりん候も笑
 一くかり勝もさうはきくさるく大あくびて諦らわ
 竹枝を引おびハとが久新大の端をう一見世の天明を



三
 事一も書も正月もさう次
 煙がたつー兼五の軍一日々ー月書の子
 西隣をたふすさね本の南座怒れさるまゆ新
 あそ二お隠し家お尋てお法乃核通とれ小書酒
 かきまとも格料出て思ふるやりのうろ店三十日もさる
 其因おが紙石使なり新世也洞前乃少紙敷下駈り
 死なまの命乃難面くてさりと悲しくけさすー事
 母歎おさうお姉お妹紙足ゆま他父娘婿のぶらち色る
 あゝるをやさう小娘ハ親のふえハ我男を引連我女
 事一も書も正月もさう次



三
 ちくはらせむ女あつらふものうつくしき一こめらむく海
 とを得えくはば遊一さつ針道さくぬ道ぞとひさ
 をかふ洞紙かろ一あはれ乃すくぬがと一と
 ち祿色一で命かろりとあつらひ一転く男ハ初ハ水
 書勅一ふあ心一胸さつとを病中望人の入とる
 ち切り女ハ科なるとは世えぬと捕えくとくハ
 斤小者責刺さく其初沙汰なり一申行方さす
 かりみき

竹葉紛芳
柔叶含花
可與西園之
主旅而多力
但子孫傳
字在甚為

